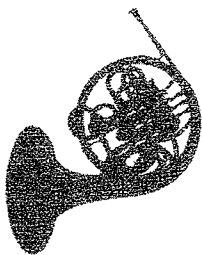


アンケート 現代の「めい演奏家」



あなたにとって現代の「めい演奏家」と思える人を五人挙げてください。「めい演奏家」とは名演奏家、迷演奏家、いや、瞑でも嗚でも明でもいいですよ。

と、いろんな人に聞いてみました(どんな人かは、編者責任で簡単な説明を添えてあります)。そうしたら……いろいろな演奏家がいるものです。

掲載の順番は、ほぼ編集部への到着順です。本書レギュラー執筆者は、最後にまとめてあります。

ところで、「現代の」というのは、「生きている」という意味のつもりで回答をお願いしたのですが、ごく最近亡くなったのならともかく、十年、二十年前、それどころか五十年前の演奏家の名前も出てきて、これにはちょっとビックリ。めい演奏は時間を超越するのかもしれないですね。

20

●川村龍俊

(会社経営者にして街道一のジョン・ケーシ愛好家、また入場無料イベント WINDS CAFE を毎月主宰。芸術全般に対して鋭く、温かい視線を持ち続ける)

ラインベルト・デ・レーウ(ピアノ、指揮)

ジュリアーノ・カルミニョーラ(バロック・ヴァイオリン)

江村夏樹(ピアノ)

寺嶋陸也(ピアノ)

鈴木弘尚(ピアノ)

デ・レーウの実演を聴いたのは二十年以上前のこと。ケーシのノクターンを、思い切りへっぴこにやって、すまなそうな顔をしてお辞儀をしたのが忘れられない。しかし、CDでのサティの演奏は一度聴いたら忘れられない遅さ。もうほかのサティはデ・レーウとの比較でしか聴けない。

カルミニョーラを初めて聴いたのはNHKのテレビだった。別室にいた私を家内がすごいやつてるから早く来てと叫び声で呼び、見たらほんとにとんでもなかった。実演を見にいったらかっこよかった。ヴァイオリンはこうやって弾かなくちゃいけない。弾かないときはだらんとしよう。

日本で日本人が弾くクラシック音楽を日本人が聴くことだって真っ当だなあと思うのは、たとえばこの三人の演奏を聴くとき。ぐにゃぐにゃの体から繰り出す最初の一拍で聴き手をKOする江村、月着陸船を手動で操縦するかのごとき手付きと表情がクールすぎる寺嶋、抒情を聴き手に抱かせる天賦の才があふれだす鈴木。